

次の文章は、井上靖の小説『姨捨』(一九五五年発表)の一節である。「私」は子どものころ姨捨山にまつわる伝説を知って強い衝撃を受けた。後年、「私」は、七十歳になる母が「姨捨山に棄てられたい」と言ったのを聞いてから、その母の言葉がずっと気になり、母を背負って姨捨山付近を歩く自分を空想したりした。以下は、そのような「私」が講演のために九州を訪れたときの場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

私は九州へ旅行すると決まった時、妹に会って来ようと思った。そして東京を立つ前に、母から住所を聞いて、電報で会いたい旨を連絡して置いていたのである。私は清子が訪ねて来るかも知れないし、来ないかも知れないと思った。

その夜、講演会場から旅館へ戻ると、部屋の隅の縁近くところに、妹は予想していたよりは明るい顔で、小ざつぱりした身なりをして座っていた。グレイのスカートを履き、純白の毛糸のセーターを着、髪は流行のショートカットで、実際の年齢は三十四歳なのに、一見すると二十四、五歳にしか見えなかった。「とにかく食べるだけは食べていますわ。贅沢はできないけど」

清子は言った。遠賀川の河口近い海岸の町の飛行場の内部にある美容院が、彼女の現在の職場であった。そこで清子は二十歳前後の娘たち何人かと、自分が何となく頭株のような恰好で、外国の女たちを客にする仕事に従事しているのであった。

私たちは久しぶりで会った兄妹としてそれにふさわしい口調で話した。彼女の破鏡についても、その後の行動についても、私は兄としての立場から言うべきことは沢山あったが、それには一切触れなかった。すべては、今更どうなる問題でもなかった。二人の子供まで残して家を出したくらいだから、彼女には彼女なりの覚悟もあり、考え方もあると思われた。

話題には自然両親や兄妹のことばかりが選ばれた。

①「おふくろは相変わらず姨捨だよ」

と私は言った。

*姨捨という言葉は、母が姨捨に棄てられたいと言った時以来、時々兄妹の間では使われていた。子供たちには便利な言葉であった。実際に母が姨捨に棄てられたいと言ったことはいかにも母らしいことで、その性格のいいところをも、

②「共通の言葉」

③「き、かけ、わだかまり」

悪いところをもそれは端的に現していた。従って、姨捨だよという言葉の中には、母の自尊心や気儘や気難しさへの軽い非難と、反対にそれらを肯定する子供たちだけに通ずる母への「苦しい気持ち」も含まれていた。

清子は私の言葉で一瞬可笑しさを噛み殺したような表情を取ったが、

「姨捨といえ、わたし、母さんはあの時、本当に姨捨山に棄てられたいと思ったのではなかったかと思うわ」

と言った。

「どうして？」

「なぜか、そんな気がします。本当に一人きりだけになって、一切の煩わしいことから離れ、心から、どこかの山の奥へ棄てられたかったのではないかしら」

「よせよ」

思わず私は言った。清子の言い方に何となく、こちらをはっとさせるようなものがあつたからである。

「前から、君はそんなことを考えていたのか」

「いいえ、たつた今です。兄さんが姨捨という言葉を出した時、ふと、わたし、そんな気がしたんです」

私は、いつか自分が母を背負って姨捨付近を歩いたあの空想の一場面を思い出していた。そしてあの時感じた冷んやりした思いが再び自分を襲って来るのを感じた。

それから清子はしばらく考えるようにしていたが、

「わたしだって、家とび出す時は、そんな気だったんです。何というか、こゝう、急に一切の煩わしさから離れて一人になりたくなっちゃって――」

「姨捨へ棄てられたかったのか」

「まあね」

「若い婆さんだな」

「七十には間があるけど」

それから、清子はその時だけ暗い表情で笑った。自分の行動をそれとなく弁解しているようにも受け取れたが、またそれはそれで彼女の気持ちは全く別の

ところにあるかも知れなかった。

私は彼女が置いて来た二人の子供については何も話さなかった。彼女もそれについて触れたかったであろうが、それに耐えている風であった。

清子が子供のことが心配だと言えば、私は、そんなことは当然だ、初めから判っていたことではないか、と言うほかはなかった。それを私も清子も知っていた。

その晩二人は枕を並べて眠った。いかにも炭鉱町の旅館らしく、建物は幾棟にもなっていて、どこか遠くの部屋で宴会でも開かれているのか、三味線の音や男たちの高声、女たちの嬌声などが遅くまで聞こえていた。

翌朝、私は電車で一時間かかる場所へ帰って行く妹を、その町の駅まで送って行った。早朝だというのに、すでに街は埃っぽく、人々は大勢出歩いていた。人口六万の都市だというのが、宿の女中の話では絶えず増減があり、郊外のそれを併せると倍近くになるだろうということだった。いかにもそうした街の持ち方、そんな落着きなさが、道の両側の商店のたたずまいにも通行人の足の運び方にもあった。豆炭工場の煙突から出る煙が空をどんよりと曇らせている。

私は行く手に大きい三角形のボタ山が二つ見えている通りを妹と並んで歩いた。清子は自分がそれから乗る電車の沿線にも同じようなボタ山が幾つも見えると語った。

駅へ着くと改札口のところで、

「東京へ帰りたいけれど、当分はね」

清子はそんなことを言っ、ちよつと淋しそうに笑った。

「同じ働くなら、東京でもいいじゃあないか」

「でも」

意味不明な表情を取ったが、

「もうしばらくここで働いて技術を身につけますわ。技術を身につけるといことから言えば、相手が外国人だからここがいいと思うんです」

技術の習得の問題はともかくとして、清子は恐らく自分が出来た家から少しでも離れて住んでいたい気持ちであろうと思われた。

「ひどく叱られるかと思って、びくびくもので来たんですけど、来てよかったわ」

「叱りはしないよ。叱ったって取り返しはつかんじゃないか」

「これからお手紙出していいですか」

「いいも悪いもないだろう」

「では」

清子は擦り抜けるように改札口を通り抜けると、右手を上げて、掌だけをひらひらさせた。少女のようだった。苦勞している女の仕種ではなかった。

同行の連中とこの町を出発するまでにまだ二時間近くあつたので、私はメインストリートを通り抜けて町端れまで散歩した。料理屋と旅館とパチンコ屋がやたらに多くて、そればかりが目についた。私は昨日この土地の人から、この町の下が坑道になっているので、時々地盤が陥没して家が傾くということを聞いていたので、注意して歩いたが、それらしい家にはぶつからなかった。ただ、町の端れになると大小の水溜りがあちこちに見受けられた。あるいは、これこそ地盤が陥没して生じた窪地ではないかと思われた。

私はこうした筑豊の炭田地帯がずっと北方に海際まで続き、その海際の飛行場の中の美容室にいま妹は帰りつつあると思つた。

妹は姨捨山に棄てられたいといった母の気持ちに彼女らしい見方をしていたが、考えてみると、彼女こそ九州の炭田地帯の一角で、人工の不自然さを持つた石炭がらの姨捨山の上に出る月を、二か年近くも眺めて過こしているわけであつた。

私はふと足を停めた。昨夜清子と話してから何か考えなければならぬことがあるような気がして、落ち着かない気持ちだったが、この時、その考えなければならぬということの正体が突然はつきりした形で私の脳裡に閃いた気持ちであつた。

母を一時襲い來った姨捨へ棄てられたいといった思いは、紛れもなく一種の厭世観といえるものではないか。そして清子の、その理由は何かであれ、常人では為し遂げられぬ家庭脱出もまた、母のそれと同質な厭世的な性向が幾らかでもその役割を持つてはいはしないか。

(注) 遠賀川：福岡県を北流して日本海に注ぐ川。
破鏡：離婚。
姨捨：一般には、古くからある、老人が山に捨てられる伝説に由来する言葉。本文に出てくる姨捨山は、長野県北部にある冠着山のことである。姨捨山にちなんだ古歌に「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」がある。

豆炭：石炭、木炭などの粉末を練り合わせて作った燃料。
ボタ山：炭鉱で選炭したあとの廃石や質の悪い石炭を積み上げた山。

問一

——線a～cの語句は、本文中でどのような意味に使われているか。最も適当なものを次の各群のA～オから一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | |
|---|---------|---|------------|---|---------------|---|-------------|
| a | 小ざつぱりした | ウ | 上品で洗練された | イ | さわやかで若々しい | ア | ものの静かで落ち着いた |
| | | エ | 清潔で感じがよい | | | | |
| | | オ | 地味で飾り気のない | | | | |
| b | 端的に | ウ | 余すところなく確実に | イ | 生き生きと言葉のはしばしに | ア | 手短にはつきりと |
| | | エ | わかりやすく省略して | | | | |
| | | オ | あざやかに際立たせて | ア | 暗くかすむように | | |
| c | どんよりと | ウ | 濁って重苦しく | イ | くすんで貧弱に | | |
| | | エ | けだるく眠そうに | | | | |
| | | オ | 黒々と分厚く | | | | |

問二 ——線①「おふくろは相変わらず嬢捨だよ」とあるが、「私」はなぜこのように言ったのか。その説明として最も適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えよ。

- A 母に対するいたわりの気持ちを妹に示すことによって、妹との失われた信頼関係を回復させるため。
イ 母に対して抱いている軽い非難の気持ちを妹に表すことで、暗に妹の行動を批判しようと考えたため。
ウ 母をもてあましている実情を告げることによって、妹に兄の苦しい立場を理解してもらうため。
エ 母への共感を妹にほめかすことで、妹の行動を内心では認めている

強引なキーワード
本文の内容や表現を照らし合わせる。

自分の判断を後悔しながら生きているような人物像。

イ 家族関係を断ち切り、あえて孤独な境遇に身を置いていることと、その一方で、一人になって自由に生きていることが、自分の中でなんとか均衡を保っているような人物像。

ウ 美容の技術を習得するために家族をも犠牲にしてしまう薄情さと、そのすさんだ気持ちを打ち消そうとして、わざと年齢不相応な態度をとる頑固さを持つ人物像。

エ 一人で自由に生きるために家族を捨てるような、利己的だが決断力のある一面と、孤独な生活にうちひしがれてしまうような弱い未成熟な一面とを併せ持った人物像。

オ 煩わしい家族との関係を断ち切り、苦勞は多いが、遠い九州の地でやっと自分らしい自然な生き方を見いだしたので、少女のようにのびのびと暮らしている明朗な人物像。

問五

——線③「考えてみると、彼女こそ……眺めて過しているわけであつた」とあるが、清子を駅まで見送るところから、「私」がこのように思っている心理の説明として最も適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 炭鉱町のにぎやかで落ち着きのない雰囲気、清子にそこからの脱出を促したとき、彼女にはもうどこにも行き場所がないという、母に共通する思いが生じたのだらうと「私」は思い始めた。

イ 炭鉱町の人工的なたずまいが、現在の清子の不安定ですさんだ内面を暗示しているように思え、その思いが「私」の心の中で、「石炭がらの嬢捨山の上に出る月」というイメージにつながっていった。

ウ 炭鉱町の騒々しく落ち着きのない雰囲気、清子のやや軽薄なしぐさが呼応しているようにみえ、「私」の心の中では、妹を母と同様に「嬢捨」の状態にしておこうとあきらめるにいたった。

エ 炭鉱町のどこか殺風景な印象と、清子の生活とを重ね合わせることで、「私」は、「石炭がらの嬢捨山」の月を見ながら独りで生きてきた彼女の境遇をありありと思ひ浮かべるにいたった。

オ 炭鉱町の活気のある生活環境が、清子の将来に対する意欲をかきたて

ことを明かそうと思ったため。

○オ 母についての共通の言葉を持ち出すことで、おたがいのわだかまりを無くして話しやすい雰囲気をつくるため。

問三

——線②「清子の言い方に何となく、こちらをはっとさせるようなものがあつたからである」とあるが、清子はどのような言い方をしたのか。その説明として最も適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 子供たちの間では、「嬢捨」という言葉を、母の気難しさをほめかすときに用いてきた。清子は、これを常識にはずれた母のふるまいを指す言葉として捉え、意識的にその後の母を心配しているような言い方をした。

イ 子供たちの間では、「嬢捨」という言葉を、母の複雑な思いをいたわる意味に用いてきた。清子は、これを母のわがままな性格を示す言葉として捉え、そのような性格を冷静に批判しているような言い方をした。

ウ 子供たちの間では、「嬢捨」という言葉を、母の性格を示す独特の含みをもつものとして、軽い皮肉を込めて用いてきた。清子は、これを文字どおり母の本音を示す言葉として捉え、真剣に考えているような言い方をした。

問四

——線③④の、清子の言動やそれに対する「私」の判断などから、清子のどのような人物像がうかがえるか。その説明として最も適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 家族関係の煩わしさを解放されれば自由に生きられると考えて一人になったが、実際には、孤独と生活の苦勞の中にしか身が置けなくなり、

ているのを知り、「私」は、彼女が「私」の心配をよそにたくましく生きていくであろうと、「石炭がらの嬢捨山」の月を見ながらしみじみと感じた。

問六

——線④「その考えなければならぬ」ということの正体」とあるが、ここでの「正体」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「私」は、兄の自分でさえ立ち入ることのできない清子の残酷で利己的な性格に直面し、崩れていく家族関係の中で、結局それぞれが独りで生きていくしかないという思いに駆られた。「正体」とは、「私」がそのような思うにいたった、家族の情愛や信頼感を否定する「一種の厭世観」のことである。

イ 「私」は、荒涼とした炭田地帯で独り生きる清子に哀れさを感じ、彼女の内面は、死出の旅路につきたいという願望を嬢捨伝説に託した母の心情に等しいと思った。「正体」とは、「私」がそのような思うにいたった、現実を拒絶するような虚無的な「一種の厭世観」のことである。

ウ 「私」は、清子の厳しい生活体験からにじみ出てくる非情な人間洞察に驚き、あらためて母の言葉を重く受けとめた。「正体」とは、「私」がそのような驚き、受けとめるにいたった、世間体を気にせず虚無的に生きるという「一種の厭世観」のことである。

エ 「私」は、清子が母に同情するのを聞いて、清子が結婚後家庭を捨てたのは、母から影響を受けた結果の、現実生活から脱出したいという心情だとわかった。「正体」とは、「私」がそのような理解するにいたった、一切の人間関係を切り捨てたいという「一種の厭世観」のことである。

オ 「私」は、家族との触れ合いを求めながらもあえてそれを拒むような、清子の新たな一面を理解でき、それが「嬢捨山に棄てられた」という母と同じ心情であることを知った。「正体」とは、「私」がそのような理解し、知るにいたった、煩瑣な人間関係を断ち切りたいという「一種の厭世観」のことである。

2面性